

「しずくのぼうけん」



マリア・テルリコフスカ 作
うちだりさこ 訳
ボブダン・ブランコ 絵
福音館書店 1969

水の一滴を“しずく”と呼ぶことを知りました。
梅雨に入って、たくさん雨が降りました。晴
れている日はとても暑いです。

そろそろ園庭でも水遊びがはじまりますね。今回の本は“しずく”のお話し。村のおばさんのバケツから、ぴしゃんと飛び出した一滴が旅に出ます。

という私たち大人は・・・“しずく”は蒸発して空に帰るんだろう、長い旅をして海に出るんだろう、などと想像しながらページをめくるのですが、ちょっと違う。旅の途中では“凍結破碎作用による岩石破碎”（水道管の破裂ならわかるけれど・・・）なんていう私たちの日常ではおそらく経験することのない出来事も起こり、旅の最後は“つらら”です。川は出ていましたが、海なんて出てこなかったし。

ポーランド、ワルシャワで1965年に生まれた絵本です。絵本の世界では50年以上子どもたちに愛され続けている作品は珍しくありません。園の「しずくのぼうけん」には2016年128刷とあります。50年以上前の北の街の子どもたちと、めぐみ幼稚園の子どもたちが、同じ本を手をしているのはなんだかうれしい。

北海道より北の国ポーランド、首都ワルシャワは海（北海）から遠く離れています。海を見たことのない子どもたちがこの本を手をしているのかもしれないですね。毎日きれいな有明海を見ている私たちには水はやさしく大きな存在です。たくさん“しずく”が“海”と呼ばれることを知っています。じゃあ“つらら”って見たことあるかな？触ったことあるかな？

水の一滴には“しずく”という名前があるのです。

「知らなかった」に出合えることはなんだかうれしい。

神様がおつくりになったこの世界に、まだまだ「知らない」がいっぱいあるのもうれしい。

幼稚園の営みの中で、みんなで成長していきましょう。